

# メカジキ インド洋

## Swordfish, *Xiphias gladius*

### 管理・関係機関

インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

### 利用・用途

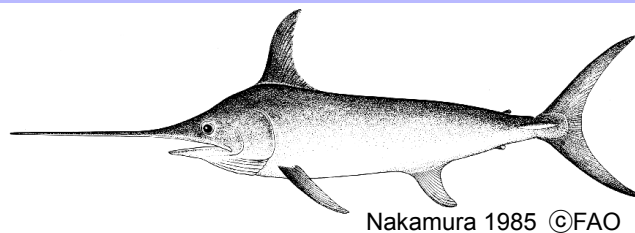
刺身、寿司、切り身(ステーキ)、煮付け

### 生物学的特性

- 寿命: 調査中
- 成熟開始年齢: 調査中
- 産卵場: 産卵場はソマリア沖とインドネシア沖にあると考えられている。
- 索餌場: マダガスカル～南アフリカ沖合域及び豪州南西部沖合
- 食性: 主にイカ類
- 捕食者: 調査中

### 漁業の特徴

従来、日本・台湾がまぐろ類を対象としたはえ縄で混獲していたが、1990年代から台湾・スペイン・インドネシア・オーストラリア・レユニオン・スリランカ等が本資源を主対象とした操業を開始し、漁獲量が急増した。また、近年減少傾向にはあるものの、便宜置籍船による漁獲も、依然として無視できない量である。

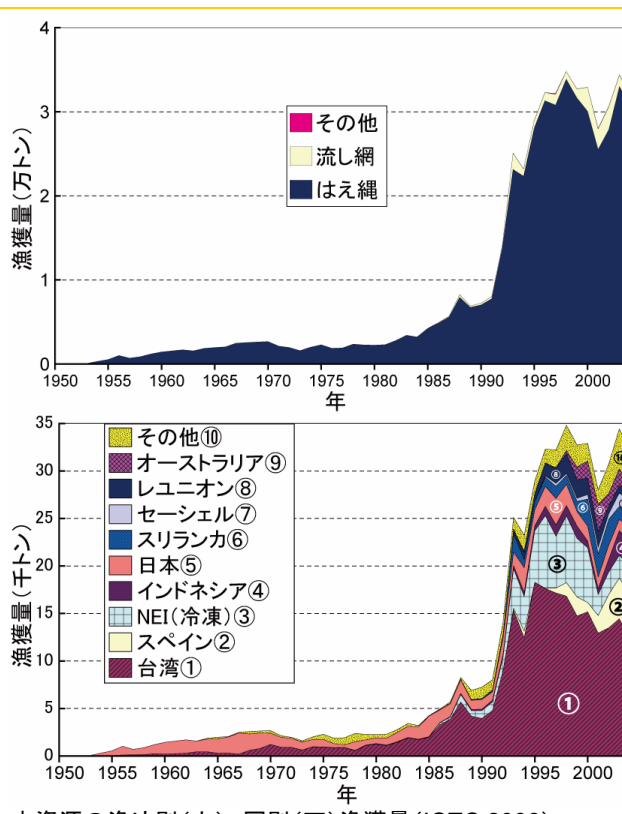
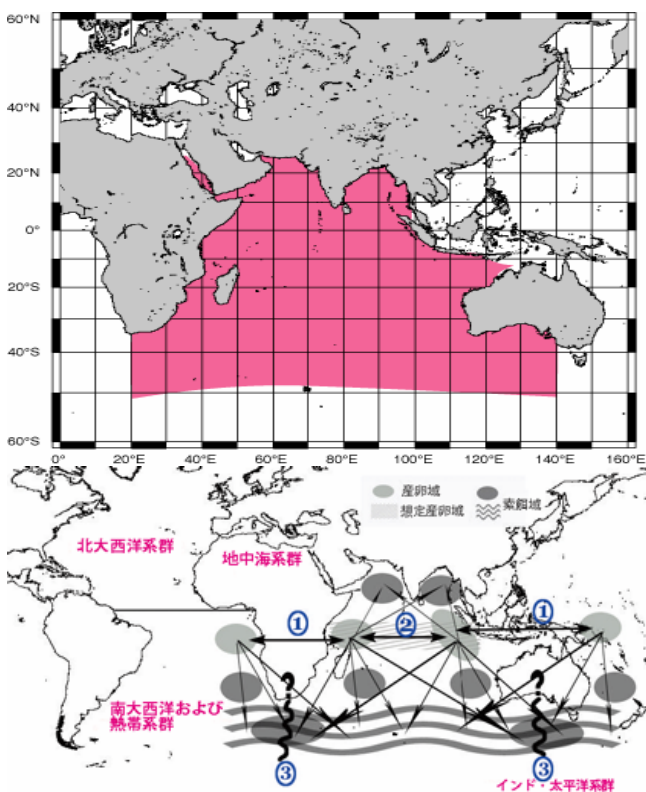


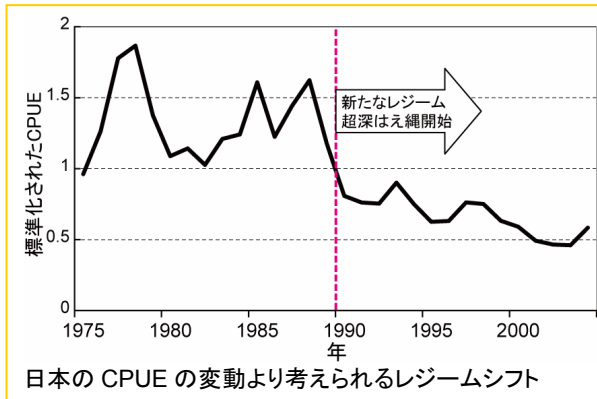
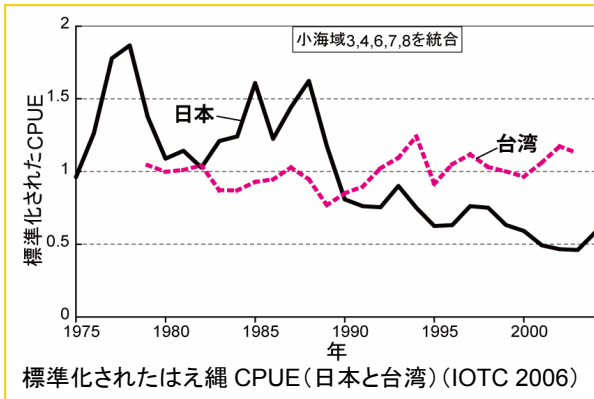
### 最近一年間の動き

IOTCの2006年の第5回かじき作業部会の検討結果では、最近5年間の平均漁獲量(3.2万トン)が、MSYレベル(2.3～2.7万トン)以上で持続的生産量でない。また、南西インド洋では地域的な資源減少が著しく、関係漁獲努力量を削減すべき、とされた。

### 漁獲の動向

1990年代からの漁獲の急増は、主に台湾のはえ縄による。総漁獲量は1998年に3.5万トンがピークで、2004年は3.2万トンである。我が国の漁獲は全てまぐろ類が対象のはえ縄操業の混獲で、近年は漁場が高緯度域に広がり、漁獲量は1千トン台である。



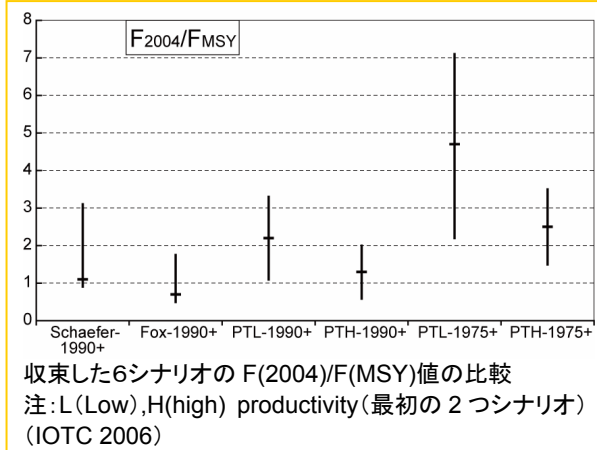


## 資源状態

2006 年の IOTC の第 5 回かじき類作業部会で、ASPIC で資源評価を行った。日本・台湾の標準化 CPUE を検討した結果、台湾は target の効果が充分反映されていないせいか、1990 年以降漁獲量が急増・CPUE は微増の傾向にあり、非現実的なため使用しないことになった。日本の CPUE は、1990 年以降は、減少傾向で現実的だが、それ以前は、漁獲量が微増傾向の一方で、大きく変動し、不安定な状態で非現実的なように見られた。そのため、解析期間を 1990 年以前にわけ、日本の CPUE のみで ASPIC 解析を行った。各期間で、3 種のモデル (Schaeffer, Fox, PT: Pella-Tomlinson) と 2 種の産卵型 (PT のみ) の合計 10 件のシナリオで解析し、そのうち 6 件が収束した。その中で、1990 年以降のデータを使い Schaeffer, Fox モデル使用の場合、最も当てはまりがよかった。その結果、 $MSY = 2.4 \sim 2.7$  万トン、 $B_{2004}/B_{MSY} = 1.2 \sim 1.6$ 、 $F_{2004}/F_{MSY} = 0.7 \sim 1.1$  となった。2000~2004 年の平均漁獲量は 3.2 万トンで、1995 年より 10 年間 MSY を超えた過剰漁獲状態が続いている。

## 資源評価まとめ

- 資源評価は IOTC において実施
- 資源は中位減少、現在の漁獲は過剰



## 管理方策

本資源で漁獲量及び全ての努力量の増加は許すべきではなく、特に漁獲が集中している南西インド洋では努力量を減少する必要がある。

## 資源管理方策まとめ

- 漁獲量、漁獲努力量を現状より増加しない。
- 南西インド洋で、漁獲努力量削減。
- 違法・無報告・無規制 (IUU) 漁業対策
- 他国漁船の受入制限
- はえ縄船トリポール使用 (南緯 30 度以南)

## メカジキ (インド洋) 資源の現況 (要約表)

資源水準	中位~低位
資源動向	減少
世界の漁獲量 (2000~2004 年)	28,008~32,918 トン 平均: 32,258 トン
我が国の漁獲量 (2000~2004 年)	1,170~1,569 トン 平均: 1,391 トン